

The interview series

過去を紐解く歴史探訪は 現代社会を見つめる鏡となる



文学部准教授

みやま じゅんいち

宮間 純一

MIYAMA Junichi

Profile

中央大学文学部史学科日本史学専攻卒業後、同大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程修了。中央大学文学部兼任講師や立正大学文学部非常勤講師、宮内庁書陵部研究職、国文学研究資料館研究部准教授、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授などを経て2018年より現職。専門は日本近代史及びアーカイブズ学。2016年には「国華の成立 明治国家と「功臣」の死」(勉誠出版)で日本風俗史学会 第28回江馬賞を受賞。

先生のご専門について
お聞かせください。

「歴史学」と「アーカイブズ学」という二つの立ち位置から日本の近代史を研究しています。専門的な研究を志した原点は、学生時代の指導教授である松尾正人先生との出会い。松尾先生は、日本近代史を専門とする歴史学者で中央大学名誉教授です。ゼミで歴史学に魅力を感じ、純粹に「もっと勉強したい」と思い続けて今に至ります。

また、博士論文提出前から宮内庁の書陵部という部署で公文書を管理する業務に携わり、その後、国文学研究資料館という研究機関では、公文書だけではなく民間の蔵に眠っている古文書などを保存・活用するための研究業務に従事しました。学生時代からの学問的な関心と実務経験がリンクしたことで、歴史学とアーカイブズ学を往來する研究につながっています。

具体的には、どのような研究
をされてきたのでしょうか。

起点となった研究テーマは、戊辰戦争と明治維新です。私は旧幕府軍と新政府軍の政治闘争や軍事抗争よりも、民衆の行動に興味があり、新たな史料を探し出しては知られていなかった事実を集め、分析を進めていきました。

地域の民衆は軍隊の侵攻により食人や馬の提供を強いられます。とはいえただ従うわけではなく、新政府・旧幕府両方の勢力が通過する地域では、時に応じて臨機応変に対応していたことがわかりました。民衆は生き残るために「したたか」に状況を判断し、行動していたのです。

このように古文書などの史料を紐解き、客観的に過去の出来事を明らかにする歴史学の手法が、実証主義史学です。ただ私は、研究の過程で「史料とは何か」という疑問にぶつかりました。史料を書いた人物と、それを後世になつてから読む研究者の間には当然ながら溝があり、史料は研究者それぞれがフィルターを通して読まれるため、解釈には差異が生じます。そこで着目したのが、「文書とは何か」「文字記録とは何か」を体系的に研究する学問分野としてヨーロッパで生まれたアーカイブズ学です。18〜19世紀に文書館が誕生したフランスやイギリスなどでは、国民の共有財産として歴史的文書が認知されており、文書管理の専門職である「アーキビスト」は、社会的にもステータスが高い存在です。

一方日本では、1980年代後半以降にようやく学問分野として形成されたばかりで、現在でも途上の段階です。言い換えれば、日本史学にはアーカ

イブズ学的な視点からアプローチする余地が残されているということです。

また、学問に留まらず国会などで議論する際には、エビデンスとなる文書の明示が理想であり、そのためにも厳格な文書管理が不可欠。「記憶にございません」で済ませないためにも、アーカイブズ学を敷衍する必要があるのです。

歴史学とアーカイブズ学は、
どのように違うのでしょうか。

たとえば、ある町役場で古い公文書が発見されたとします。従来の歴史学では、その文字情報にフォーカスし、じっくり読み込むことで内容の理解に努めます。一方アーカイブズ学では、町役場の組織体制を把握したうえで、どの部署で作成され、なぜその文書が必要だったのか、さらにはその町の人々の生活と文書の関係まで検証します。当然ながら、群としての全体像を理解できてこそ個別の文書の理解も深まります。参照すべき資料は多くなり手間も増えますが、アーカイブズ学の手法を応用すれば歴史学の研究も深くなっていくと考えます。

現在、歴史学は転換期にあり、歴史学の今日的意義や「本当に客観的な事実を証明できるのか」という問いが投げかけられています。旧来どおりの実

証主義史学の手法のまま史料に接し、當時を評価しようとする限り、歴史学は次のステージに進めないと考えています。

歴史の見方そのものを
考え直す必要性があるという
ことでしょうか。

「歴史学の意味」という根源的な問いに突き当たって私が考えたのは、「現代の人々にとつての意味」と「現代のわれわれにとつての意味」の両方を考える、ということでした。

そこで私は、明治維新がこれまでどのように解釈され、説明されてきたのかを探ってみました。

たとえば、1968年には「明治100年」、2018年には「明治150年」として、日本政府は記念事業を企画しました。そのなかで政府は、「明治維新によって日本は近代化に成功し、豊かな国になった」と振り返るわけです。しかし、日本が急速に近代化し、帝国化した結果として行き着い





たのは第二次世界大戦での敗戦です。そう考えると明治維新は失敗だったという評価もできるのですが、政府はそれには触れず、あくまでも「明治維新は現在の豊かな日本をつくったスタート地点」と語ります。語り手の性質や姿勢を知るうえで、その時代の歴史観は一つの材料になるのです。

ちなみに戊辰戦争の直後にも当時の新政府が「明治維新とはいかなるものだったか」をまとめる作業を行いました。もちろん新政府は「明治維新は天皇が主権を取り戻した変革であり、新政府は正当性をもって成立した」と自らを正当化します。また、明治以降、天皇に尽くす「勤王」の精神で亡くなった人や、旧幕府に処刑された人など、明治維新の殉難者を全国各地で顕

彰し、神社や顕彰碑を建立したのです。

また、地域単位でも独自に明治維新を振り返る動きが見られました。明治維新を主導したと自負する地域では、地域への利益誘導を目的に、政府に寄り添う姿勢で歴史をまとめ、「我が郷土にはこれだけ天皇に尽くした人材がいた」と強く外部向けにアピールしました。一方で、政府への対抗意識がある会津などでは、戊辰戦争での悲劇を一つのアイデンティティーとして、より内向きに郷土意識を高めるようになります。明治維新が各地域で記憶され、語られていった経過を見ると、地域社会の成り立ちや、現在にも残る独自の地域性が形成された背景の理解に役立つのです。

一般的に明治維新は右肩上がりのサ

クセスストーリーとして描かれますし、旧来の社会構造を壊したことは確かです。ただ、すぐには新しい価値観を構築できません。たとえば、廃藩置県の後にも、地域のアイデンティティーとして藩をベースとするコミュニティは生き続けました。また、江戸時代の身分制度は廃止されますが、旧来の身分にこだわり続ける人々も少なからず存在していました。近世を生きてきた人々にとって、自己の価値観や抛り所が崩壊した明治維新は、必ずしも喜ばしい変革とは限らなかつたと解釈できるのです。

明治維新後に「国史」という枠組みが生まれたのは、このような人々を「日本国民」にする必要性に迫られたからです。江戸時代には、「自分は日本人である」というアイデンティティーは誰もが持つていたわけではありませんでした。そこから「日本国民」で構成される近代国家として「日本国」を定義するために、戸籍制度や共通の言語、そして共通の歴史を持つことが大前提となつたのです。

**日本のアーカイブズ学は
現在どのような状況に
ありますか。**

アーカイブズ学の難しさは、何を残すべきかという文書の評価・選別です。

歴史学上重要な意味を持つ史料が、行政側の視点でいとも簡単に捨てられることもあります。さらに、市民の立場では、また別の史料を重要視することもあるでしょう。研究者はどんな史料にも意味を見出し、研究対象にできまので、極論すればすべて保存しておくてほしいと考えます。要は正解がないからこそ、多様な意見を把握したうえで基準を設け、責任を持って判断できる専門職としてアーキビストが必要なのです。

実は、明治維新を推し進めた新政府の要人たちは、アーカイブズの存在を知っていました。岩倉使節団がヴェニス
の文書館に案内され、130万冊にも及ぶ資料を目の当たりにしたことは、使節団の記録に残っています。つまり、知ってはいたものの導入しなかつたのです。彼らは官僚が作成した公文書を市民に広く公開するシステムを認めず、アーカイブズをつくる選択をしませんでした。

戦後、1971年によく日本にも国立公文書館が設置されましたが、「公文書が（健全な民主主義を支える）国民共有の知的資源である」と明記されたのは、2011年の公文書管理法です。「官僚がつくった文書は官僚のもの」という意識が、なんと150年近くも続いていたのです。近年は国会で

も公文書改ざん問題がクローズアップされますが、それは公文書が公開されるようになったから。昔は誰も閲覧できなかったため、改ざんする必要もなかったのです。

今後の研究テーマや、
社会還元に関する考えを
お聞かせください。

現在関心があるのは天皇制です。私は1982年に生まれ、昭和天皇が「崩御」した1989年当時は6歳でしたが、わずかながら記憶にあり、天皇が日本にとって特異な存在だということ初めて感じました。そして今、歴史の研究者として日本の近代史を考えるうえで、天皇制に触れないわけにはいきません。最近でも皇室に関わる話題、特に皇位継承問題が社会的な関心事となるものの、天皇制や皇室制度の根幹に迫る議論が出てこないのは不思議に思います。だからこそ、日本社会が天皇を必要としてきた歴史的背景や、天皇制を継続させてきた体制を追究したいと考えています。

歴史学は、医学や工学のように新たな技術を開発して人命を救ったり、利便性を高めるたりするような学問ではありません。しかし、さまざまな情報が氾濫するなかで、人々が自らの価値判

過去を紐解く歴史探訪は
現代社会を見つめる鏡となる

イギリス国立公文書館 The National Archives



イギリス・リッチモンドにある国立公文書館「The National Archives」と公文書の表紙。イギリスやフランスなどには、アーカイブズ学や文書管理の実務ノウハウを学べる教育機関も整備され、専門職としてアーキビストが養成されている。

断を行うために役立つ研究成果を発信することは、人文科学者にできる社会還元だと思います。書籍や論文、学会や講演などで積極的に考えを発表し、世に問うていきたいと考えています。

学生にはどのような指導を
なさっていますか。

学生には、第一に歴史や過去を振り返る自分を考えてほしいと思います。目先の実利的な課題の解決には役立たないかもしれませんが、振り返った結果はあくまでも個々の解釈でしかないかもしれません。それでも過去に目を向けることは、自分自身の未来を見めることにつながるのです。

東日本大震災の発生後は、研究者も一般の人も災害史に関心を持つ人が増えました。今を生きるために、自分が住む地域でどのような災害があったのかを認識しようとしています。過去への興味は、今の自分を見つめ直し、未来において自分が行動する指針を認識するための作業でもあるのです。

日々の勉強においては、書物の内容を受動的に学ぶのではなく、能動的に批判しながら読んでほしいと思います。「なるほど」「いい本だった」で完結させることなく、批判的な思考によって興味・関心を広げ、次の一步につな

げていく姿勢を身につけてほしいのです。研究者も批判し合わなければ成長できませんので、私自身も強く意識していることです。

また、卒業論文の作成では、専門的な成果として新発見があれば素晴らしいのですが、大部分の学生にとって大事なものは、論文作成の過程です。批判的な目を養い、国内外で資料を探し出す行動力やコミュニケーション能力、そして自分の考えを発表する力、最終的に論文として活字にまとめる力を身につける手助けをすること。これが、研究者であると同時に教育者として学生指導にあたる私の責務だと考えています。

◎近著紹介

『天皇陵と近代 地域の中の大友皇子伝説』
(平凡社)



大友皇子の墓は、宮内庁によって「弘文天皇 長等山前陵」として滋賀県大津市御陵町に治定された一方、千葉県君津市では同市内の白山神社古墳に大友皇子が埋葬されたと伝えられており、長らく異説が主張されてきた。近代日本において、人々が自らの居住地や出身地に天皇陵が治定されることを望み、ときには執拗なまでに検証と主張を繰り返す歴史的背景を紹介する。

中央大学教員に
研究のアレコレを聞く
インタビューシリーズ
Multi
Angle
vol.16
まるちあんの
まるちあんの